

交流日記 — 友達とつないだバトン

名古屋市立笹島小学校 六年

柴田智莉

私には、生まれつき体幹障害があります。早産でとても小さく生まれたので、呼吸状態が悪く、主に足にマヒが残ってしまいました。そのため、小さい時から病院などでリハビリの訓練を受けたり、いろいろなそう具を使って、日常生活をなるべく自分の力で送れるように毎日がんばっています。

障害があることで、最初に一番困ったことは、幼稚園や保育園選びです。前例がないからと断られる園が多いなか、ある一つの保育園に会い、入園することができました。そこでは、スイミングやアート、体操教室やクッキング、英語教室なども、周りのお友達と変わらず参加させてもらうことができました。私にとって初めての社会との関わりとなったので、障害があっても仲良くしてくれたお友達、サポートしてくださった先生方には、心から感謝しています。

小学校には、車いすで通っています。毎朝学校に着くま

で、母と楽しくおしゃべりして、教室までは教頭先生が案内してくださいます。いつも私がかがけているのは、教室に入る時、元気な声で「おはようございます。」と自分からあいさつすることです。担任の先生やクラスの友達も気持ちよくむかえてくれます。

二年生の冬、足の手術をするために、特別支えん学校に転校して、医りようセンターに入所しました。手術は無事成功したけれど、長いリハビリ期間があつて、元の学校の友達とは会えなくなってしまうました。支えん学校から医りようセンターに戻ると、毎日リハビリの集中訓練があり、週末にしか家に帰れませんでした。日曜日の夜、センターに戻る時、悲しくて涙があふれました。病とうのガラスのとびらが閉まった後も、しばらく帰っていく家族のかけがなくなるまで見つめていました。

この約半年間のつらい日々を支えてくれたのは、私の帰りを待っていてくれる、元の学校の友達との交流日記で

す。おたがいの学校で今どのような勉強をしているか、クラスの楽しいできごと、はげましのメッセージなど、たくさんやりとりをしました。絵を書いたり、折り紙を折ってくれた友達もいました。うれしくて、私も訓練で習った編みこみをモールで作ってノートにはりました。退所するまでの間、この日記は途絶えることなく、担任の先生がお見舞いの時に持ってきてくださったり、母が学校に届けてくれたりしました。今思い出しても苦しい毎日だったけれど、友達との心のつながりが、私を強くしてくれました。いつかきっと元の学校に戻るんだ!!という決心が生まれて、訓練や学校生活を精一ぱいがんばることができました。

もうすぐ手術から四年がたちます。あの時の自分よりできるようになったこと、まだ苦手なこと、悔しいけれどできないこと、いろいろあるけれど、障害があっても周りの皆との関わりの中で、自分らしく生きることが大事だと気づきました。私にとつて、交流日記はすばらしい宝物で、ずっとこれからも大切にしていきたい友達との絆です。

コロナの時代になって、人とのつながりがしや断されてしまうけれど、こんな時こそ皆が皆のことを思いやって、一人一人ができることを続けていけたら幸せだな、と思います。私もいつか大人になったら、助けが必要な人や困っている人の役に立てるように、いろいろなことに挑戦していこうと思います。

「大好き」時々「うつとおしい」後、「ごめん」

神戸市立御影小学校六年
瀬崎優心

私は、妹の事が大好きです。大好きすぎて自然学校で少しの間、妹と離れてしまっただけで、寝言で、「ごごちゃん、一緒に寝よう。」

と言ってしまうくらい「大好き」なのです。

妹は、とてもかわいくて、面白くて、いつも笑顔で、私が泣いていたら抱きしめてくれる優しさを持っています。そんな妹なので、私は妹のことが本当に「大好き」なのです。

でも、最近ふいに、妹のことを「うつとおしい」と思ってしまう時があるのです。

例えば、自分の思い通りにならない事があると、すぐキヤーキヤー言って周囲を困らせたりする時。私が急いでいるのに、用意がおそくて、言うことをきいてくれない時。私が友達という時には、その友達の妹や弟達と比べておしゃべりが下手な私の妹を「はずかしい」と思う時。そして、私は、そんな妹をついつい無視してしまうのです。

そして、その後私は、いつも妹に対して、「ごめん」と思

い、胸が少し苦しくなります。

私のそんな姿を見た母が、大学生の人達を書いたというレポートを見せてくれました。そこには、障害のある兄弟姉妹を持つ、私のような「きょうだい」達が抱く思いが年齢と共に変わっていく事と、周りの人々との関係について書かれていました。

今、私もいる青年期の「きょうだい」達は、障害のある兄弟姉妹を否定してしまったり、友人に対する気まづさをみんな、持っていました。そしてそれは、今の私が持つ気持ちと同じだと気づきました。母は、私の今の気持ちは、特別な悪いものではなく、「きょうだい」がみんな持つ当然の気持ちなのだと言ってくれました。

また、レポートには、学校の先生や地域の人々からの気遣いや理解が、「きょうだい」達の不安やこ独感を軽減させ、うれしく思ったと書いていました。私の場合も、小学校の先生方は、妹に対して優しく、私に対しても、妹のことを

「かわいい」と言ってくださったり、優しく話し相手になってくださいます。地域の人々も、道ばたで泣いたりさげんだりする妹に庭の花をつんでくださり、妹の気分を変えてくださったり、日ごろから妹に何かと話しかけてくださります。そんな時、私もとてもうれしく思います。

これまで何年かこの「心の輪を広げる体験作文」を書いてきて、障害を持つ妹をありのまま受けとめ、応援することや、妹とは違う障害を持つ人達について考え、学んできました。そして今回は、自分自身の気持ちと向きあってみました。私が妹の事や私自身の気持ちを認められたのは、周囲の人達の気遣いや優しさがあったからだと思えました。私の他にも、世界中にはたくさん障害のある兄弟姉妹を持つ「きょうだい」は居るはずです。その子達もいつか私がついていたような気持ちを感じ、苦しい時があるかもしれない。でもそれは、私達の心が成長している証拠であって、悪い事でも特別な事でもないこと、兄弟姉妹を「大好き」だと言う気持ちがあれば良いのだと、母が私に伝えてくれたように、私もみんなに伝えたいです。

参考文献

越智彩帆他4名「重症心身障害児のきょうだいが抱く思いの変容と周囲の人々との関係性について―青年期のきょうだいに對する聞き取り調査から―」

『Journal of Inclusive Education』VOL.3 2017

ゆうき

世田谷区立旭小学校一年
そと ずみ しゅうと
外角秀仁

たぐさんのあめがふったひのことです。

ぼくは、はじめて、ていでんというのを、たいけんしました。まつくらでなにもみえませんが、テレビもききました。めを、いつもとおなじようにあけているのに、いっしょにあそんでいたおとうとのゆうとのかおがみえませんが。

「ママー まつくらでこわいよー」

2かいにいるままにさげました。

「だいじょうぶ？ ゆうとはいる？」「ママのこえがきこえます。ゆうとをさがさななきゃ。」

「ゆうとーゆうとー」

「いっくらよ」

こわいからハイハイをしてこえのするほうへうごきます。おとうとのゆうとは、ちよつとだけしゃべることががてです。

5さいですが、さいきんやつと、すこししゃべれるようになりました。

るかと、ぼくたちふたりにきいてきました。

あ、おもいでした。あります。どうろにきいろいラインがあります。

じてんしゃでとおるとき、ゴンゴンするラインはおうだんほどうや、でんしゃにのるときにもあります。

「あれは、めのみえないひとがあんぜんにあるけるようにあるんだよ」「ママがいました。」

「え、みえなくてあるけるの？」

ぼくは、さつきまつくらでこわくて、あるけなかった。まは、しろいつえのはなしもしてくれました。ぼくは、そんなだいなラインだとしらなくて、きいろのラインのうえをあるいてしまいました。みえないつとでもこわいのにあるなんてすごいです。

ゆうきがあるとおもいます。

ぼくのおとうとも、ちゃんとしやべれなくてもがんばって、げんきよくあいきつします。

めのみえないひと、じょうずにしゃべれないひと、みんなてをつないでなかよくできたら、こわいものもなくなつて、えがおがたぐさんになるんじゃないかな。

ぼくも、ゆうきをだして、こまっているひとがいたら、こえをかけるようになりたいです。

でも、うまくことばがいえなくて、あいてにつたわらないで、くやしそうです。

6さいのぼくより、しっかりしていて、がんばりやさんなのですが、うまくほんごがしゃべれません。

まつくらで、こわいぼくだけど、ゆうとはへいきです。

「しゅうと、こつちらよ。まつくららね」

「だいじょうぶ？ こわいね」

「こわくないよ。てをつなごう」「ゆうとはたくましいです。てをつなごう」

ふたりでしぼらくてをつないでじつとしていました。

「いっしょから、だいじょうぶらね。まつくら、いやらね」

「めがみえないとこわいね」

「あ、あかるくなったよ」「よかったね」

「ママー」

「こわくなかった？」「ママがききました。」

ママが、どうろにあるきいろのラインを、みたことがあ